

「心のうちにキリストを」

エペソ人への手紙 3 : 17 a

March.5.2023

エペソ人への手紙 3 : 17 a (パウロ)

Preface

皆さんの心のうちにキリストは住んでおられるでしょうか？

3週ぶりになりますが、今、使徒パウロのエペソ書における2度目の祈りについて学んでおります。

パウロは、エペソの信徒に宛てた手紙の中で、「信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」と祈っています。

では、なぜ、このような祈りを献げたのか？

考えられる理由は二つです。

エペソの信徒たちの心のうちにキリストが住んでいないように見て取れたからという消極的な理由。

そしてもう一つは、エペソの信徒たちの心のうちにキリストが住んでいることは見て取れるけれども、なお、キリストがその心のうちにおいて成すべきことを十分に、大いに成して下さる幸いにさらに与ることを願ってという積極的な理由。

皆さんの心のうちの現状は、どちらでしょうか？

キリストが心のうちに住んでいない、または、住んでいて下さり、なおキリストとともに歩む幸いに与りたい。

いずれの理由にせよ、ここで一つ疑問が湧いてきます。

それは、「イエス・キリストを我が救い主だと信じ告白したならば、もうすでに、そのキリスト者の内にイエス様は住んでいて下さっているのではないだろうか？ なぜ、あたかも二重になるようなことを求めているのだろうか？」という疑問です。

例えば、第一コリント 12 : 3 等の聖書箇所を見ますと、「聖霊によるのであれば、だれも『イエスは主です』と言うことはできません」と言っていますが、この言葉は、私たちのうちにキリストの霊であられる聖霊がいて下さっているゆえに信仰告白が口を突いて出て来るということを教えてくれます。

つまり、「イエス・キリストを信じます」と告白できた時点で、それは、私たちのうちにキリストが働いて下さり、聖霊が共にいてくださるようになった証拠だと言うのです。

なのにここで、パウロは再度、「あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」と祈ります。

あたかも、二重にキリストを求めているかのようにも感じてしまいます。

もっと言いますと、エペソ書におけるパウロの1回目の祈りの中にも、言葉は違えど同じような内容の祈りが出てきます。

エペソ人への手紙1：17（パウロ）

Part One

エペソ教会の信徒たちは、もうすでにキリストを信じている聖徒たちです。

天地万物をお造りになった唯一まことの神を信じ、知る者とすでになっています。

なのに、ここで今一度、二重に感じてしまうような祈り、「神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」と祈ります。

3：17の「あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」という祈りと、その意味するところは同じです。

では、この二つの祈りの内容を通してパウロが示唆していることは何でしょうか？

「イエスは主だ」と告白した人生最初のあの聖霊体験・キリスト体験が、信仰のすべてではないということですね。

「一度信じて、はい終わり」ではないということです。

信じた先に、もっと知るべきことがあるということです。

信じた先に、もっと知るべきことがあるということを考えてみますと、出エジプトをしたイスラエルの民たちが思い出されます。

イスラエルの民たちが、出エジプトをするために10の災いを経験し、追ってくるファラオの軍勢から逃れ、神様が割ってくださった海を渡り、とてつもない神の救いという奇跡を体験したあの瞬間が信仰のすべてでもなく、終わりでもなく、始まりであったということが思い出されます。

イスラエル民族の出エジプトの目的地は、目の前に広がっている荒野ではなく、乳と蜜の流れる地、約束の地、カナンのが目的地です。

神様が彼らに成して下さった救いのわざの目的は、彼らを奴隷の身分から解放して荒野で暮らさせ、荒野にほっぽって置くことではなく、約束の地カナンの地に入れる入ることが目的です。

それなのに、イスラエルの民たちは、救われて出て来た奴隷という束縛とは無縁の自由な荒野を前にして、「あの束縛の中にあっても、美味しいものが食べられたエジプトの方がよっぽどマシだった」といつも嘆き、いつも不平を口にし、

いつも恨み辛みをモーセにぶつけながら、約束の地カナンの地を見失い、神より与えられし恵みと自由を感謝することが中々出来ずに、荒野の中でより良く暮らすことがあたかも目的のようになり、荒野の荒れ果てた様子に身を任せるように生きてしまいました。

私たち生まれながらの人間が、天地万物をお造りになった唯一まことの神を知りますと、この世はあたかも荒野のようなところであるという霊的事実に気付かされてしまいます。

そして、その荒野において、罪の奴隷から解放されて与えられた自由を神と共に生きることが試されますが、イスラエルの民たちには、「真理があなたがたを自由にする」という言葉を遂行し、全うするための能力や力が、救いを体験した正にその始まりの時点では、当然ながらまだありませんでした。

神様が自分たちに成して下さった救いのわざの豊かさを、広さを、深さを、大きさを、エジプトから出て来たばかりのまんまの姿では、到底分かり得ることが当然ながら出来ていなかったということです。

自分たちに与えられた約束して下さったものがどれだけでかく、どれだけ満ち満ちた恵みであるのかが分からないんです。

だから、先週のキル先生のメッセージの中にもありましたが、たった三日で彼らの口から賛美が消えてしまいました。

皮肉なことですが、せつかく肉の欲と心の望むままに生きるこの世の流れから自由の身となり、空中の権威を持つ暗闇の世界の支配者たちに立ち向かえるようになったのに、真理による自由の身を持て余し、むしろその自由が恐ろしくも感じてしまうわけです。

以前見た映画の中で、何十年という刑務所生活を送った登場人物たちが釈放されて、所謂娑婆に出て来たは良いもののその自由になじめずに、「やっぱり、刑務所暮らしの方がいい」と、わざと盗みを働き再び刑務所に収容されて行くことを喜んだり、または、トイレに行くのにもいちいち許可をもらわなければならなかった刑務所の束縛の方が、自由な娑婆よりも暮らしやすかったと自死してしまう者たちもいました。

自由の身になったものの、その自由が自由に感じないほどに、心底刑務所暮らしの束縛に体質が適応してしまっていて、待ちに待った自由が自由に感じるための体質改善を待つことが出来なかったために起こった、得も言われぬ人間の悲しい性がここにあります。

イスラエルの民たちも、荒野という自由を、荒野ではあるけれども与えられたまことの自由を神と共に生きながら、目的地であるカナンの地に憧れ、焦点を合わせ、そこに向かって生きて行くことよりも、エジプトの方式で生きることに関縛られ、いつまでも、あの海が割れファラオの軍勢が海に飲み込まれた瞬間ばかりに心が向き、「また、あのような奇跡を与えて欲しい」と、現実逃避の訴えばかりをしてしまいました。

神の特別な選びと偉大な恵みによって始まったすべての霊的祝福を、与えられた信仰の旅路を、一步一步、一日一日、神様と共に歩いて行く比類なき尊さには、中々その関心と視線が行かずに、「エジプトでは肉を食べられたけれども、出て来た荒野ではマナばかり」だと嘆きます。

マナの煮込み、マナの丸焼き、マナの漬物、マナの味噌汁、マナのぶっかけ、マナの丼ぶり、マナの刺身、たまに隣り近所から差し入れられるのは、マナのチヂミか、誕生祝いだとくれるマナのパンケーキ。

「寝ても覚めても、毎日マナばかりだ」と、天から彼らのためだけに降って与えられるそのマナの特別な意味、つまり、神が共にいて下さり、彼らの内に内住して下さっているという神のご臨在への感謝、どんな些細なことも感謝となり、どんな困難でもやがて益とされ、成長と成熟へと繋がり、神の子らしい内容の伴った霊的体質改善が成されたキリスト者とされて行く上ですべて必要なものにして下さる神の御手を求めるよりも、肉がない、酒がない、お金がない、私のプライドが立たないと、神の約束の成就であるカナンを見据える生き方ではなく、エジプトばかりを懐かしみ、羨ましく思ってしまう姿を露呈してしまいます。

目の前にある現実の中に共にいて下さる神との時間を大切にし、感謝し、喜ぶよりも、何かこう飛躍的なことばかりを期待して、実直に一步一步神と共に生きるということをして避けてしまうのです。

信仰生活において、生涯そうめったに訪れることのない海が割れるというような特別な恍惚のような瞬間だけを求めることが信仰となってしまって、いつまでもたってもエジプトを出て来たあの出発点の周りをぐるぐるぐるぐる回っています。

結局、歩いて10日あれば行ける距離にあるカナンの地に入ることもなく、紅海の周りで40年間を過ごして終わってしまいました。

神を信じる者とされたからには、そのねじ曲がった性根を、知性を、感性を、理性を、感情を、心を変えて頂くために、神の御言葉の前に伏し、神の民の群れに仕え、自分を殺し他者を立てる愛を練習し、励み、努めて行きながら、神と共に我が内に住んでいて下さるために自らを整えていく必要があるのに、それよりもとりあえず、一発逆転のどんでん返しを求める博打のような嘆願書ばかりを神の前に提出してしまう。

そして、その嘆願書が受け入れられたのか、受け入れられなかったのかをもって恐れ多くも神を計り、信仰を計ってしまう。

そんなことがないようにと、パウロは今一度、その神様の成して下さったもの、成そうとしておられることの広さ、長さ、高さ、深さがどれほどなのかを毎日毎日知り続けて行き、やがて約束の地、神の国、天の御国、新天新地に至れるようにと、「あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」と祈るわけです。

「神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますよう

に」と祈るわけです。

かつて、いつまで経っても変わろうとしない、変わろうと決意をしないイスラエルの民たちと神様が共にいることをお辞めになると仰ったことがありますが、そんな時、モーセが仲保者として、神とイスラエルの民たちとの関係を取り持つ霊的仲介者として立ちました。そして祈るんです。

「どんなに乳と蜜の流れる約束の地に入ったところで、そこにあなたが共にいて下さらず、あなたが共におられないならば、私たちの歩みに、私たちの人生に、私たちに与えられた物に何の意味があるのでしょうか！あなたが私たちのうちに住んでいて下さるからこそそのことではないですか！」と、祈り倒します。

すると、神様はモーセに、「あなたの祈りにわたしは応えよう。あなたはわたしの心に適う」と仰り、神が共に住んでいて下さることを何よりも大事にしたモーセのことを、神様は穏やかに、そして非常に喜ばれました。

モーセは、神を自分の内にお迎えし、神が共に住んでくださることを何よりも大切にしました。

神を知ることを、神を知り続けることを信仰としたのです。

神を知り続けるために神のご臨在を、神が共にいて下さることを求め続けました。

そして、神が用意して下さった約束された約束の地に入れられることがどれだけ素晴らしい特別な恵みであるのかを日々心新たに実感し、肉的には荒野のようなところに住んでいるけれども、霊的には真理によって自由にされた神の民という身分を全うすることに焦点を定め、神の民らしい姿に変えられていきながら、人々にこの福音を宣べ伝えることに価値を見出せるようにと、神がその内に住んでくださることを求めました。

Part Two

このことは、新約時代に生きる私たちにもそっくりそのまま当てはまります。ヨハネの黙示録に行ってみましょう。

ヨハネの黙示録 3 : 14 - 22 (パワポ)

イエス様が私たちの心の戸の外に立って叩いておられる絵を思い浮かべる方もいらっしゃるかもしれませんが、イエス様は今も、私たちすべての人の心の戸の外に立って、叩いておられます。

「いやいや、私はもうすでにクリスチャンで、イエス様を主と告白しているから大丈夫です。心の戸を叩かれてはいません」と思う方もおられるかもしれませんが、この御言葉は、ラオディキア教会という教会のもうすでにイエス・キリストを信じている信徒たちに宛てて書き送られたイエス様の言葉です。

「わたしは、あなたがたの心のうちに住みたいと願い、今もあなたの心の戸を叩いている」というイエス様ご自身の言葉です。

戸を開けたら、熱心に悔い改めなければならないから戸を開けないでいるのか、面倒くさくて戸を開けていないでいるのか、自分の思いを捨てイエス様の言葉に従うことが嫌だから戸を叩く音を聞こえないふりをしているのか、単純に聞こえていないのか、いずれにしろ、イエス様が蚊帳の外におられます。

私たちのうちに信仰告白はあるものの、なぜだか、イエス様は私たちの心の外におられます。

だからイエス様は、「あなたがたはクリスチャンであるはずなのに、わたしをあなたの心のうちに住まわせないでいる」と、仰るわけです。

で、このイエス様の語り掛けて下さっている言葉が深刻で、重大なのが、15節、16節に表れています。

ヨハネの黙示録3：15－16（パワポ）

主イエスを信じる者であるにもかかわらず、その心のうちにイエス・キリストを日々の暮らしの人生の主としてお迎えする生活をしていないことに対する厳しいイエス様のお言葉です。

聖霊によって信仰告白をしたにもかかわらず、救いを与えられたにもかかわらず、あたかもその内にイエス様がいないかのように、御言葉に聞くこともなく、聖書の命令に従うこともなく、熱くも冷たくもない吐き出してしまいたくなるような生ぬるいところを、私たち生きてしまうこともあると警告してくださいます。

せつかく与えられた救いから弾かれてしまうことがあると、躊躇なく仰います。

ただこの言葉は、厳しくも、私たちのことを思ってこそその、また霊的奮起を期待してのイエス様の言葉です。

私たち人と接していても、ここまで厳しいことを言えるのは、そこに信頼関係がなきゃ言えませんし、期待がなきゃ言えませんし、良かれと思わなければ言えません。

その人のことを思ってこそ言える言葉です。

でもやっぱりある意味、とても怖い言葉でもあります。

深刻で、重大で、怖い言葉であるのですが、このシリアスな警告が、シリアスな言葉として中々迫って来ない鈍さが、私たちの内にはあります。

「大丈夫。そうは言っても、イエス様は赦してくださっているし、全部理解して分かってくださっているから、大丈夫」と、イエス・キリストを我が内にお迎えすることに熱心になれない鈍さがあります。

一生懸命に、全力で、真剣に話しているのに、へらへらと薄笑いを浮かべてしまうような霊的鈍感さが私たちの内にはあるように思います。

人を家に招待してお迎えする時は、きれいに掃除をしますし、身なりも整え片

付け、緊張感をもって色々と準備をしますが、神を、主イエス様をお迎えする時は、着の身着のまま、頭もぼさぼさ、パジャマ姿で、きれいに掃除することもなく、「イエス様、これが、僕の私のあるがままの姿ですから、どうぞお受け入れください。お入りください」と、人には果たす礼儀を神には果たさないような生ぬるいことを勝手に良しとしてきたようなところが私たちなかつたでしょうか。

イエス・キリストが我が内に住んで頂くことにおいて、熱心になれない鈍さが私たちには確かにあると思うんです。

だから使徒パウロは、そんな人々のために祈ってくれます。

「信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」と祈ってくれます。

パウロはそう祈りつつ、その祈りの言葉を聞いて、霊的奮起を期待してくれているようにも感じます。

Part Three

ヨハネの黙示録 3 : 18 (パウロ)

私たち誰もが豊かな者になりたいと思っていますし、恥はさらしたくないですし、物事の本質を見る目を持つ者でありたいと願っていますが、果たしてその豊かさと、恥をさらさないことと、物事を見抜く視点をどこから得ようとしているのでしょうか？

誰か立派な人の言葉からでしょうか？

これまで培ってきた知識や経験からでしょうか？

または、所謂、富と言われるありとあらゆるものからでしょうか？

イザヤ書 55 章に行ってみましょう。

イザヤ書 55 : 2-3 (パウロ)

「もういい加減、魂の食糧にもならないもののために金を払い、霊の腹を満たさないものの周りをぐるぐる回りながら労するスパイラルから脱して、わたしの言葉に聞き従い、豊かな者となって、恥を覆って頂き、本質を見る視点をもって、元気づいてくれないか」と、神様が熱をもって語り掛けて下さいます。

ならば、神の言葉に耳を傾け、聞き、御言葉を生きるために、自らを神の言葉に従わせる練習をしたいと思うんです。

耳を傾け聞く練習を、祈る練習を、愛する練習を、赦す練習を、自分を否定する練習をするんです。

実際に聖書の言葉を一人で読んでみようとしみますと、その時間を作ることが何と億劫で、時間を作って読んでみたはものの、自分の考えとは大分相違があったり、難しかったり、読みにくかったり、すぐ隣にある小説や漫画本がチラつ

いたり、また実際に祈ってみると、なんとまあ雑念が次から次と思い浮かんできて、5分と目をつぶることが出来ずに、携帯に手をやり、人に話しかけたくなることか・・・

愛そうとするけれども、逆に腹だたいことが目に付き、赦そうとするけれども、赦したくない気持ちが積み重なり、自分を否定するよりも自分を肯定したい気持ちが勝ると、一朝一夕には、中々イエス様の言葉に従うことは困難ですが、それでも、主イエス様を心のうちに住まわせてくださいますように、自分に鞭打って辞めずに、諦めずに、聖書に聞き、祈り、愛し、赦すことを緊張感をもって、ちょっとずつでも、1mmずつでもやり続けるのです。

すると、そこに、私たちの内にイエス様が住んでいて下さることを実感し、時に適って元気づいていることに気付かされることでしょう。

Conclusion

最後にイエス様の約束の言葉を読んで終えたいと思います。

ヨハネの福音書 14 : 18 - 21, 23 - 24 (パウロ)

イエス様は、私たちを「孤児にはしない」と約束して下さいました。

「あなたがたがわたしのうちに、わたしがあなたがたのうちにいる」と約束して下さいました。

そして、「誰でもわたしを愛している者は、わたしの戒めを保ち、わたしの言葉を守り、わたしの言葉を守るその人のところに来て、ともに住む」と、約束して下さいました。

使徒パウロは、このイエス様の言葉を信じ、守り、行いう信仰によって、「あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」と、祈ったわけです。

ならば、私たちも祈ろうではありませんか。

イエス様の言葉を信じ、守り、行いう信仰によって、その信仰を緊張感を持って練習しながら、「キリストを私たちの心のうちに住まわせてくださいますように」と祈って行こうではありませんか。

私も、日々そう祈っていきたいと思います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書 3 : 17 a